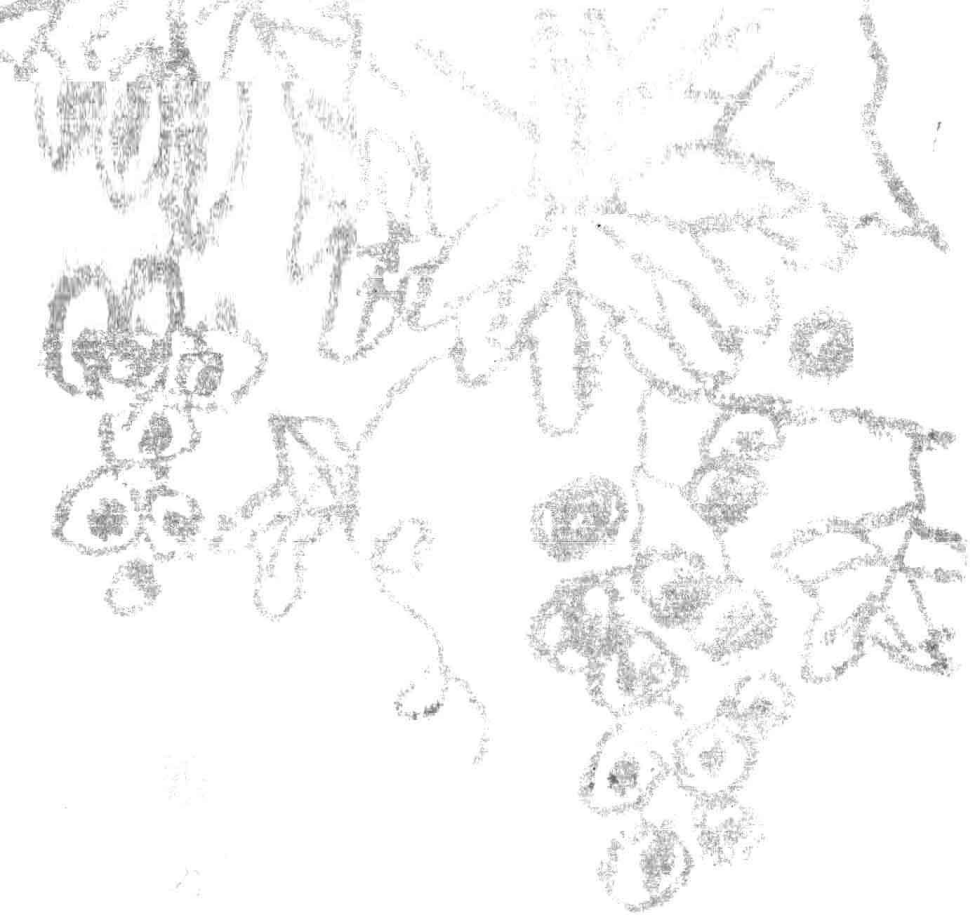


娘の縁談

林房雄著



卷之六 絲談

松
房
雄



新編新報

談 緣 の 娘

昭和三十年六月六日 印刷
昭和三十年六月十日 發行

定價 貳百參拾圓
地方賣價 貳百四拾圓

著 者 林 房 雄

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐藤義夫

印刷所 東京都文京區柳町二六
山元正宜

發行所 東京都新宿區矢來町七一
株式會社新潮社

電話東京(34)七一二一八番
振替東京八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷 三晃印刷株式會社 製本 新宿加藤製本

Printed in Japan

目次

ミス・キャット	五
博士の意見	一四
女の暴力	二三
七寶ロケット	三二
ふるさと山	四七
黒潮の男	五八
迷路	七一
晝の雨	八〇
ユモレスク	九三

家庭パーティ		一〇〇
大阪まで		一一六
おばあちゃん		一二三
天守閣		一四七
湖畔の宿		一七〇
水の影		一九三
降車口		二一〇
エピソード		二二九

挿	装
畫	幀
清	鈴木
水	信太郎
崑	

娘
の
縁
談

ミス・キャット

三種病院長夫人は、近ごろ、だいぶ御きげんななめである。このところ、一週間以上も銀座に出ない。赤坂の自宅の離れの部屋で、コタツにもぐりこみ、白ネコのウサを相手に暮している。

パーティーの招待や氣の向かぬ訪問客があると、病氣と言つてことわる。

「きつと肝臓のせいよ。心臓もいくらか弱つて來たらしいわ。だつて、あたし、すこし無統制にふとりすぎたんですもの」

しかし、良人の三種博士の診断によれば、夫人の肝臓にも心臓にも全然異常はないそうである。

「君の肥満症は體質的だよ。肝臓も心臓もクジラみたいに健康だ。氣にすることはないさ」

「じゃあ、アレルギイかノイローゼ」

「病氣まで流行にこだわらなくてもいいよ。君は僕と結婚したころは十六貫ジャスト、息子を生んだ後でちよつとやせたが、今は十六貫五百……」

「いいえ、十六貫と三百でございますわ」

「つまり、そこいらを上下しているのさ。娘時代とたいして變らない。肥満は君の健康の象徴だ。もつと遠慮な

くふとりたまえ。結婚三十年。ノミの夫婦と言われることには、僕も不感症になつてゐるからね」

「でも、あまりふとりすぎて、空氣がぬけたらどうしましょう。きつと、賣れ残りのレモンみたいに、黄色くしなびて、しわだらけになつてしましますわ」

「人間の毛穴は空氣が抜けない仕かけになつてゐるよ。たとえ空氣が抜けて黄色くしなびても、君の結婚適齡期はとつくの昔にすぎているから、賣れのこる心配もない。……それよりも、どうだい、君の商賣の景氣は？」

「何のお話でございますの？」

「君の縁談業さ。いや、巡航船事業だつたかな？」

「まあ、あなたは、朝つばらから、あたしをからかいにいらつしやつたのね！」

「いや、病氣だと聞いたので、出勤前にちよいと回診に來たのだ」

「いいえ、あなたは結婚以來、あたしを赤ん坊あつかいにして、三十年間、からかいつづけてきました！」

「それなら、仲のいい證據じゃないか。女房をからかつて樂しんでいる亭主なんて、今時めずらしい。珍重すべき旦那様だね」

「ええ、その點は、ずつと感謝しつづけていますわ」

「ほう、脳神經の方も健全らしいね。……さて、本物の患者諸君が待つてゐる。僕は病院に行くが、君は銀座を

歩いた方がいいね。肥満症には運動が何よりだ」

博士の診断は正しいと、三楠夫人も心の中では思っている。

夫人の「病氣」の原因は肝臓でもアレルギーでもない。彼女の「巡航船事業」の不振である。大熊小太郎君とミドリさんの結婚がケチのつきはじめであつた。最後の強引なすべりこみで、仲人の役だけはつとめさせてもらつたものの、これは玉突で言えばブロックで、點だけはかせげたが、なんとも後味がよろしくない。二人の新婚旅行を見送つた後に、いつものような勝利感と満足感に残らなかつた。

三楠夫人はヒサの上でノドをならしている白ネコの頭をぽんとたたいて、

「ねえ、ウザ、お前だけは、あたしのこの氣持をわかつてくれるわね」

「ニャーオーン」

「おお、そうなの。よく解つてくれるわね、ウザ。今は時期があるいのよ。あたしもがまんしているのだから、お前もがまんするのですよ。春になつたら、いい縁談の相手をさがしてあげますからねえ、ウザ」

「ニャーゴ！」

ウザはベルシヤの血がいくらかまじつた小生意氣な白

ネコである。ほつそりととがつた鼻と大きな耳とすんなりとした前足が、先代羽左衛門にそっくりだというので、つけられた名前がウザ。

「お前は血筋も毛なみもちゃんとしたメネコですよ。變なオネコが呼びに来て、出て行くのではありません。縁談のことなら、みんなあたしにまかせておけばいいのです」

氣のめいつた時には、ネコはいい話相手である。

小太郎君の結婚が黒星のつきはじめで、次に手がけた縁談が二つとも、つづけて破談になつてしまつた。破れるはずのない話が、成立の一步手前で破れて、しかも、その原因が夫人にはさつぱり見當がつかない。まるで、かげでたれかが糸をひいて、意地の悪い妨害でもやつていふような氣がする時もあるが、さてだれがと考えてみても、その心當りはない。

「ねえ、ウザ、仲人にもスランプというものがあるのかしら？ あと二回で五十回なのよ。今年のクリスマスには、盛大な縁談五十回完成祝賀會をやろうと思つていたのに、四十八回でストップしてしまつたわ。巡航船はあと一息のところ、ドックに入つてしまつたのよ。こんなことがあつていいものかしら？」

「ニャーワン、ニャーウオーン！」

「まあ、いやよ、ウザ。そんないやらしい聲を出して！」



こい

だが、おかしな聲を出したのはウザではなかつた。いやらしいオネコの鳴き聲は障子の外の庭の方から聞えて来た。

「ニャオ、ニャオ、ニャオ、ニャーローン！」

性急にたたみかけて来る戀ネコの誘い鳴きである。

ウザは大きな耳をびんと立て、眼の色を變えて、夫人のひざからとびおると、障子の方へかけ出した。

庭のオネコは鳴きつづけている。

夫人は自分の耳をうたがった。今は冬で、ネコの戀の季節ではない。にもかかわらず、ウザは戀の誘いに心もそろと言いたげな様子で、障子の前を右にゆき左にとび、すき間を見つけて庭にとび出そうとする。このままにしておいたら、障子に大穴をあけられてしまう。

三楠夫人はあわててコタツぶとんをはねのけて立上り、ウザを左の小わきにハンド・バッグのようにかかえこんで、右手でさつと障子をあけると、庭に向つてどなつた。

「おだまり！ どのノラネコかしらないが、いくら誘惑しても、うちのウザは、仲人なしには結婚しませんよ！」

返事はなかつた。冬枯れの茶庭は午前のおすら日の中でしたんと静まりかえつて、ネコらしい姿はどこにも見えなかつた。

「いやなドラネコね。ほんとに圖々しいつたらありやしない。榮養がよくなると、動物の交尾期も人間並みに季節がなくなると、うちの先生がおつしやつたけれど、やつぱりほんとだつたのね。どこにかくれているの？ このオネコなの。男なら男らしく、返事をなさい」
すると、濡縁ぬ縁の向うのそで垣のかげから、氣取つたネコの返事が聞えた。

「ニャーウオーン。あたし、女よ。男ではございませんの」

三楠夫人はキモをつぶしてとび上つた。

ウザもびつくりしたらしく、夫人の腕の中からとびおり、こそこそとコタツの方に逃げて行つた。

「だれよ、あんた、人間なの？」

「はい、ウザを誘惑したのは、あたしでございますのよ、おぼさま」

そで垣のかげから、落葉色のオーバーのえり元にクリインのマフラーをのぞかせた、眼の大きい、アゴのくくれた、フランス人形めいた顔の、小柄な娘が姿をあらわした。

「まあ、チコちゃん！」

「あたし、お見舞に來たの」

チコと呼ばれた娘は飛び石つたいに小ネコのように近

づいて來て、

「御病氣いかが、おぼさま？」

「病氣ではございません！」

「やつぱり、まつ赤な假病だつたのね。女中が面會謝絶だと言つたので、庭からまわつて、奇製作戦をとつたのよ。成功したわね」

「餘計なこと言わずに、お上んなさい。用事は何なの？」

「いろいろあるのよ」

チコは上つて來たが、コタツには入らず、その代りオーバーもぬがず、窓ぎわのソファに腰をおろして、

「いいわね、この部屋。吉田五十八くずしでしょう。ネコと二人でひつそりと暮すのには、おあつらえむきね」と、おかしなほめ方をした。

三楠夫人はコタツにかえり、

「あなた、いつの間にネコの言葉をおぼえたの？ フランス語を勉強していたのではなかつたかしら？」

「ニャーオーン！ あたし、これでも女優のタマゴよ。だから、フランス語も勉強するし、ネコ語も研究しなければならぬの」

と言いつながら、足もとによつて來た白ネコをさつと抱きあげ、ボンと頭をたたいて、

「お前、人間に誘惑されるなんて、すこしバカよ、ウザ！」夫人はタバコに火をつけて、

「近ごろは、新劇もバケネコ騒動の芝居をやるようになったの？ あなたがネコになつたら、さしずめ、アップバーン・スタイルのバケネコね」

「みなさま、そうおつしやいます。ミス・キャット全國コンクールに出たらとすめてくれる親切な人もあるわ」

「まあ、そんなコンクールがあるの？」

「なければ、今にきつと出来ると思うわ。ミスとコンクールの全國的洪水なんだから。チコ、今日ですこし自信できたなあ。本物のネコを誘惑して興奮させたんだから、動物演技賞もらえるかもしれない。……ねえ、おばさま、チコの女優としての演技もそろそろ一人前に近づいて来たのよ。おかげさまで、今度の公演にも、また役がついたの。ネコじゃないの。人間の役よ。切符ひきうけて下さるでしょう、十枚……」

とハンド・バッグを引きよせた。

夫人は肩をすくめて、

「どうせ、そんなことだろうと思つていましたよ。この夏も十枚おしつけられたわね、あなたが女中になるお芝居の切符を。……今度もまた女中？」

「ちがうの。今度は淫賣婦」

女優のタマゴはぬけぬけと答えた。「でも、フランスの淫賣婦だから、ちよいとシックで粹なのよ」

「あきれた人ね。ウザをこつちにおよこさない！」

三楠夫人は白ネコを抱きとつて、ヒザにのせ、

「いくらフランスでも、女中は女中、淫……いやな言葉ね、パンパンはパンパンですよ。ほんとに、もつと氣のきいた役はつかないの？ たえば、カルメンだとか椿姫だとか……」

「あら、おばさま、カルメンはタバコ工場の女工よ。椿姫は……つまり、その……オメカケさんみたいなものじやなかつたかしら」

「おや、そうだったの。……だから、あたしは新劇はきらいだと言つているのですよ」

「カフキと新派には、品行の正しいお姫様と人格の高い令夫人ばかりが出て來ますからね」

「皮肉を言い來たのなら、その切符はうちの先生のところへ持つていらつしやい。先生なら買つてくれるでしょう。先生はあなたのおませでひねくれたところが好きらしいから」

「ええ、おじさまはチコのファンよ。切符も十枚、昨日、病院で買つてもらつたわ。でも、あたし、おじさまも好きだけれど、おばさまも大好きよ。夫婦そろつて氣前がいいんだもの！」

「おだてても、だめ！ ……あとがうるさいから、あたしも十枚だけは引受けてあげますがね。でも、あたしは

見物には行きませんよ。なんですか、女中だとかパンパンとか。……早くあなたも、松井須磨子か川上貞奴くらしいの女女優におんななさい。その時には、あたし、切符の百枚や十萬枚は、いつでも引きうけてあげるから」

「わあ、すごい！……でも、今日は十枚で結構よ」
「あたりまえですよ」

切符と引きかえに受けとつた紙幣を、チコは手早くハンド・バッグにおさめて、パチンと留め金をしめ、

「助かつたわ、おはさま！……でも、あたし、今日は切符の押売りだけの用事で来たのではなかつたのよ」

「切符を買わされた上に、お小遣まではさしあげませんよ」

「ちがうのよ、おはさま、縁談のお話なのよ」

夫人の眼の色が變つた。

「縁談？」

「ええ、縁談よ」

「おつはつは、いやなチコちゃんね。縁談とさえ言えは、あたしが興奮して、もつと切符を引きうけると思つてゐるのね。あたしはウザじやないから、あんたの髭色にはひつかりませんよ」

「ううん、おはさま、本氣の話よ」

「おや、そうですかねえ」

「しかも、一人じやないの。二人分の縁談よ」

「えつ、二人分！」

三桶夫人はコタツから立上つて、チコと向い合つたイスに腰をおろし、聲を上ずらせて、

「いつたい、たれと、たれなの？」

「一人ずつ話すわ。まず、たれだと思ふ？」

「聞かない先にわかりますか？」

「まず、あたしの縁談よ」

「えつ？」

「ええ、あたし——泉千榮子嬢の縁談なの」

チコの千榮子さんは兩手を腰にあて、胸をつき出して威張つてみせた。

三桶夫人はタバコの吸いさを灰ざらにつきさして、

「チコちゃん、大人をバカにするものではありませんよ」

千榮子さんは小首をかしげて、

「あら、それ、どういう意味？……ああ、わかつた。

あたしを、まだ子供だとおつしやりたいのね」

「ええ、子供ですとも！縁談は大人と大人の問題です。子供の出る幕ではございません。戦後の十代の子供達がいくら早熟だと言つても、子供は子供ですよ！」

「おはさまは、あたしをいくつだと思つてゐるのかしら？」

「十八でしょう」

「ええ、十八よ、四年前には」

「そんなデタラメを言つても、たれが信用するものですか。あなたが九州の田舎から出て来た時には、まだお下げの中学生で……」

「まあ、ひどい！ あの時が十八だつたのよ」

「そうだつたかしら。ずいぶん、おチビさんに見えたわね」

「今でもチビよ。満洲と九州で苦勞しすぎたので、成長がとまつたのね、きつと」

「満洲の話はわすれましょう。戦争の悪夢よ。あなたはかけがえない両親を失つたし、あたしはたつた一人の兄を失つたし。……でも、あれからもう四年もたちましたかね」

「おばさまは他人の縁談にばかり夢中になつていて、自分の足もとで、小さなメイが成長していることに氣がつかなくつたのよ。十八の娘は四年たてば、二十二になるわ。そして、戀愛や結婚のことを眞剣に考えるようになるのね、なんだか悲しいみたいな話……」

「そうですかね。チヨが二十三！」

「と言つて、つくづくと千榮子さんの姿をながめ、「そう言えば、いくらか大きくなつたようね」

「まだ、だめなの。二十二になつても、こんなにチビなんだから、やつぱり結婚の資格はないかもしれないわ」

「チビと言つても、あたしより高いんじゃないの？」

「同じくらいね。昔なら、これでも通用したかもしれないけれど、今は八頭身時代でしょう。映畫の立見はできないの。まわりのティーン・エージャーズ（十代）がみんな見上げるほどのノッポばかりだから。……戦争に負けて、日本人も大國民になつたわね」

と、悲しそうな眼つきをしたが、急に思い出したように、

「ねえ、おばさま、女は戀愛すると、ほんとに背丈がのびるのかしら？」

「まあ、たれがそんなことを言つたの？」

「先生よ」

「どこの？」

「お宅の先生よ」

「まあ、うちの三楠が？ ……いつ、どこで？」

夫人の眼がキラリと光つた。

千榮子さんは首をふつて、

「ううん、昨日、病院に切符を賣りに行つた時、いい女優になるのには、もう二寸ほど上背がほしいのだけれど、延びる方法はないかしら、とあたしがたずねたら、先生が言つたのよ——まあ、戀愛でもやつてみるのだね」

「そんなバカな！ ……三楠とあたしとは戀愛結婚よ。あたしは三楠と戀愛したけれど、背は延びませんでした。」

横には肥つたけれど」

千榮子さんは吹き出しそうになつたのを、やつとこらえた。

「じゃあ、戀愛すれば背丈がのびるという、おじさまの言葉には、別に科學的根據があつたわけではないのね」
「科學的根據も醫學的根據もあるのですか。三楠は生まじめな顔をしているくせに、ときどき出まかせなことを言つて、人をからかつて喜ぶくせがあるのよ。あたしもずいぶんからかわれたわ。つまり、かくれたるユーモア作家なのね。そこが彼の魅力の一つかもしれないけれど……」

「ごちそうさま！」

「何を言つてんのよ。……それで、つまり、あなたは三楠にそう言われたので、背丈を延ばそうと思つて、あたしに縁談の相談に來たの？」

千榮子さんはすこし赤くなつて、

「ううん、そんなことないわ。もつと内的な要求を感じたからよ」

「内的な要求つて、なによ？　なんだか、いやらしいみたいな言葉ね」

「大丈夫よ、おばさま、チコまだ肉體派じゃないんだから。……つまり、内的な要求というのは、魂の身もだえ

ね。人間の魂は孤獨を自覺すると、愛の對象を求めて、せつない叫び聲をあげはじめるのよ」

「はあ、それで、あんなネコのなき聲を研究したのね。ずいぶん、せつなそうな叫び聲だつたわ」

「ううん、ちがうわ。それとこれとは別問題よ」

「だめ、だめ！　あたしは、ごまかされませんよ」

と言つて、コタツから身を乗出し、はずんだ聲で、「チコ、あなたは、たれかと戀愛してゐるんでしよう。白狀なさい！」

「白狀したいけれど、残念ながら、まだなのよ。愛の對象が現れない先に、戀愛をはじめわけにはいかないわ。チコ、絶対に孤獨なの。だから、ときどき魂が身もだえするの」

夫人はすつと立上つた。はねおとされたウザが、コタツのすそでしつぽを立てて、ニヤーとないた。

「そんな新劇のセリフは、ほかの人の前でおつしやい。あなたがアパートで一緒にくらしている人はあなたの何なの？　まだ、その人の名は、あたしに教えてくれないわね」

千榮子さんはふしぎそうに夫人の顔を見上げて、

「瀬木さんよ」

「瀬木何という男なの？」

「瀬木友子という女の人よ」

「どうか、怪しいものね」

「ええ、あたしも瀬木さんが男だつたらいいなあ、と思うこともあるわ。でも、残念ながら、目下のところ、女なの。……それでね、おばさま、もう一つの縁談というのは、友子さんなのよ。しかも、友子さんの相手というのが、すこし、おばさまに關係があるの」

「えつ、あたしに？」

「おじさまの病院に原口時次郎というお醫者さまがいるでしょう？」

「原口？ ああ、内科部長の……」

「どんな人かしら？」

「そうね、何とかいう映畫俳優に似ているといつて、看護婦たちがさわいでいるそうですから、つまり美青年なのね。あたしには、そんな趣味はないけれど」

「おばさま、あたしが聞いているのは、原口さんの人格のことよ」

「人格？」

「ええ、人格よ」

と言つて、千榮子さんは何物かに挑戦するように、さつとオーバーをぬいだ。下は平凡な仕立の組のスーツであつた。レースのえり飾りのついた白絹のブラウスを着ているので、清潔感だけは出ているが、どちらかと言え

ば、野暮で實用的すぎる事務員風の服である。

夫人は二本目のタバコに火をつけて、

「人格という、つまり、品行の問題ね。そこまでは、あたしは知りませんが、その原口さんがあなたのお友達……何と言いましたかね？」

「瀬木友子」

「瀬木友子さんと結婚するというわけなの？」

「ええ、目下戀愛中なの。原口さんは二三度、あたしたちのアパートに現れたわ」

「戀愛結婚には、あたしは原則として賛成しません。仲人のはたらく餘地が少なすぎますからね。それに、成立しやすいけれど、これれやすいし……」

「あら、おばさまも戀愛結婚だと、さつきおつしやつたわ」

「あたしは仲人の立場から言つていのです。原則として賛成しないけれど、眞剣な戀愛なら、もちろん喜んで仲人をお引受けしますよ。その二人はどう？ 眞剣に愛合つてゐるの？」

「少くとも、友子さんの方は眞剣よ。でも、原口さんの方は、なんだか、あたし……」

「怪しいの？」

「なんだか正體不明の怪紳士みたいところがあるの。第一、醫學博士で、内科部長で、財産も収入もある美男

の紳士が、三十三になるまで獨身でいるというのがおかしいわ。よけいなおせつかいみたいだけれど、友子さんはチョコの親友でしょう。だから、友子さんには知らせずに、おばさまに相談に來たの。チョコの縁談の方は、ほんとは後まわしでいいのよ。それほど切實な内的要求を感じているわけでもないんだから」

女中が入つて來た。

「あの、奥様、先生がお歸りでございます」

「おや、もう、そんな時刻なの？」

「はい、食堂の用意はできておりますけれど……」

病院と自宅は歩いて五分開距離なので、三楠信之介博士は晝飯は自宅でとる。

「そうね。あたし、今日はまるで食欲がないから、失禮するわ」夫人は女中に言つた。「お前、お給仕してさしあげておくれ」

千榮子さんが立上つた。

「おばさま、チョコ、お給仕してあげるわ。ついでに、おばさまの分をちようだいしてもいいでしょう。あたし、おなかペコペコ、食欲旺盛なのよ」

「うらやましいわね。あたしは食欲もないのに、こんなに肥つて……。やつぱり肝臓のせいかしら。いいわ、あたしの代りに食堂に行つて、先生の御相手をしてちようだい。うちで食事をするのは、チョコちゃん、久しぶりで

しよ。ついでに、原口さんの人格と品行問題を、先生にお聞きしてみるといいわ」

「ええ、チョコも、そうしようと思つていたところなの」

博士の意見

三楠信之介博士は食卓にアメリカの醫學雜誌をひろげ、その上に、すこし焼けすぎのトーストの粉を盛んにこぼしながら、コーヒーを飲んでゐた。食卓でも便所でも、活字に眼をさらしてゐなければ、用をたせない人物が知識人の中には少なからずいる。三楠博士もそのタイプの一人らしい。

博士のくつのかかとは、すこし床から浮いている。ノミの夫婦と自稱するだけあつて、信子夫人にくらべれば、至つて小型の紳士だ——と言つても、小さいなりにまともまつている、身だしなみのいい紳士であるから、夫人とならんでゐないかぎり、ひどくコッケイというほどでもない。そろそろ六十に近い年ごろだが、白髪童顔、皮膚もたるまず、血色もよく、その上、學者の氣品と名醫の自信と院長の貴祿を眼立たぬ程度に身につけているから、同じ小型でも、ダットサンではなく、國產愛用の主旨にはそむくが、ドイツのフォルクス・ワーゲンの堅實性とフランスのルノーの輕快性を兼ねそなえた小型紳士と言